四谷の千枚田だより

第218号

校外学習 10月18日、市内鳳来中部小30名が千枚田について、いろいろ学んだ。

本日は、校外学習へのご協力ありがとうございました。子どもたちは、小山さんの努力に感動していました。米作りについて知ることができ、大変勉強になりました。今後、学校で各自新聞づくりという形でまとめをしていく予定です。そこで、まだまだ小山さんにお聞きしたいことが、子どもたちから山ほど出てきましたので、質問させてください。5年生担任　権田先生

一問一答形式「Q&A」で記す。

Q 四谷の千枚田はいつできましたか。
A 記録にはないが、室町時代(約400年前)には、すでに田んぼが作られていた。
Q どうしてあえて斜面に田んぼが作られたのですか。
A 斜面だと、田んぼの水が取りやすい。(用水)
Q どうして、広い田んぼではなく、小さく分かれているのですか。
A 地形が複雑(急傾斜地)な場所で大きな田んぼは作れなかった。
Q 棚田は何段くらいありますか。
A 全部で420枚の田んぼが作られているから420段？かな。
Q 田んぼにわらが置いてありましたが、あれは何ですか。
A 田んぼの肥料にするため。
Q なぜ米を育てようと思ったのですか。
A 先祖から引き継いだり、景観を守りたいため。
Q 米作りを続けてきてよかったと思うことは何ですか。
A 湧き水、天日干しのおいしいお米が食べられるから。
Q 米作りをしていて、嫌なことは何ですか。
A 台風などで稲が倒れたり、稲架が倒れた時は悲しい。
Q 四谷で米作りをしている人は何人いますか。
A 36人
Q 農家ごとに別々でやっていますか。協力してやっていますか。
A 別々にやっている。
Q 肥料は入れていますか。入れているのなら何を入れていますか。
A 入れている。化学肥料(配合肥料)。干草などを有機肥料として入れている。
Q 米農家さん同士で米作りの計画を立てていますか。
A 毎年作っているから、計画は立てないが、お互いに情報交換をしている。
Q 米作りの中で一番大変なことは何ですか。また一番大変な時期はいつですか。
A 田植え(5月)と稲刈り(9月)
Q 田んぼの周辺に、他の木ではなくスギやヒノキを植えたのはどうしてですか。
A 約50年前、国のコメ余り対策(減反施策)で田んぼを作れなくなったのと、国の建築材として杉やヒノキの植林奨励があったから。
Q 今後の目標を教えてください。その目標に向けてどんな取り組みをしたいですか。
A 田んぼが減らないことと、未来へ継承(保存)していくことを願う。
Q 機械はいくつありますか。共用ですか。
A 耕運機、田植機、脱穀機、草刈り機、わら切り機、トラクターなど。個人。
Q 刈り取ったお米はどのように処理して、どこへ運ばれるのですか。
A 家族で食べたり、親戚においしいお米を食べてもらう。
Q はざかけ中に雨が降ったらどうするのですか。
A 刈った稲は、急いで稲架にかける。
Q たくさんとれる年、少ない年、例年、それぞれどれくらいのお米がとれますか。
A 豊作・不作は天候による。　収量は10アール当たり450kg程度。
Q 一番大切な作業は何ですか。
A 水の管理
Q 水の管理はどのようにするのですか。
A 毎朝、水の見回りをする。
Q 小さい田んぼが多いですが、機械は使いますか。
A ほとんど機械で行う。
Q 稲が病気になったらどうしますか。
A 消毒をする。
Q 稲を動物から守るためにどうしていますか。
A 電気柵や侵入防止柵を設置する。
Q 米作りでどんな工夫をしていますか。
A 中干しなど、丈夫な稲を作るように努力している。
Q 今困っていることや課題は何ですか。
A イノシシやシカ、サルの被害。その防除。

【校外学習概要説明】
鞍掛山に降った雨が湧水となり、全部の田んぼを潤している。日本三大石積の棚田。生きものと共生した体に優しいコメ作り。

お知らせ
恒例の「収穫感謝祭」はコロナ禍の状況を踏まえ、中止します。

猛威を振るったコロナウイルス感染症も発症数が激減、四日には名古屋市の発症者はゼロであり、コロナ禍終息の兆し？。今年こそは「収穫感謝祭」が開催もできると、勇んでいたが、新城市内で六日に一人、七日には四人の感染者が発生した。

感染の再拡大、第六波は…と心配の種は尽きない。特に、このイベントは飲食が伴うことからもして「**開催中止**」を苦渋の選択とした。

コロナ禍で足掛け二年、イベントなどの活動の中止が余儀なくされ、地域住民や都市近郊の人々の疲弊回復にも収穫感謝祭」は実施したかった。

（写真は一昨年の状況）

景観整備

十月二十四日、保存会二十二名は千枚田入口・四阿周辺、ふれあい広場の環境整備(草刈り)を行った。

コロナ禍で委縮していた(?)会員のコミュニケーションを目的に、久々に「鳥長」の皮肝で活力増進を図り、会員相互の親睦を確かめた。

棚田で花火

十月十日、海老神社の祭礼はコロナ禍のため、式典のみの祭りになってしまった。湖遊連は昨年に続き、今年も神輿などの余興の中止を余儀なくされ、地域の活性化、明るい話題を主眼に「打ち上げ花火」を奉納することとし、旧海老小と四谷の千枚田で打ち上げた。

ＮＨＫは「四谷の千枚田」を題材に春から取材を続けており、一弾(6/24)として「千枚の水鏡・田植え頃・モリアオガエル」を放送。第二弾(9/30)は「収穫の秋・中村家親子三代、棚田への想い」、第三弾(10/12)は「棚田と花火」がそれぞれ「まるっと」や「おはよう東海」。再放送で「おはよう日本」、BS などで全国放送された。

なお、七月一日にはＮＨＫ「あさイチ」で全国放送もされた。

ホットな話題

この地に生まれ育ち、豊橋という大都会に嫁ぎ八十一歳の今、旧姓今泉澄子さん・原田瞳さんは時々訪れ、眼下に見下ろす変わらぬ姿の千枚田に感謝。来るたびに使わせてもらうきれいなトイレに、故郷の皆さんの千枚田に尽力する姿が反映されており、心が温まると、トイレットペーパーなどの備品をそっと置いていかれた。

（六日の出来事）

余剰米の出荷

天候不順や飢饉に備え、棚田の百姓の多くは備蓄米を保管、新米ができても古米から食べる質素な風習がある。

十月二十八日、その、余剰米を「だんご」で有名な八雲だんごの鈴木社長さんは、千枚田保存に苦労しているお百姓さんに少しでもお役に立てば…と余剰米をお買い頂き、「千枚田五平餅」に加工、郵便局とタイアップ。宅配便として、また、道の駅など全国展開。耕作者は一様に「おかげで新米がたべられるし、オカズも買える、有難いことだ」と喜び、田んぼにお礼をと、早々に畦草を刈ったり、干し草を運んだり、耕したり、棚田保全に頑張りをみせている。

発　行　令和三年十一月十五日
鞍掛山麓千枚田保存会
文　責　小山舜二